

幻想展覧会I ニュー・ゴシック 短篇集

パトリック・マグラア&ブラッドフォード・モロー編
柴田元幸 他訳

THE NEW GOTHIC

Edited by PATRICK McGRATH and BRADFORD MORROW



THE NEW GOTHIC

Copyright © 1991 Bradford Morrow and Patrick McGrath
This edition published by arrangement
with Bradford Morrow and Patrick McGrath, c/o
Aitken & Stone Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

パトリック・マグラア & ブラッドフォード・モロー編

幻想展覧会 I

柴田元幸・他訳

1992年 6月12日第一刷印刷

1992年 6月19日第一刷発行

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店 〒102 東京都千代田区九段南2-3-28

電話 東京 (03) 3230-2131 振替 東京 2-87372

印刷所 凸版印刷

製本所 國寶社

装丁 坂川栄治

ISBN4-8288-4040-0 C0097

NDC 930 196 228

定価はカバーに表示してあります

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

幻想展览会（I）
* 目次 *

序 パトリック・マグラア&ブラッドフォード・モロー 風間賢二 訳 5

展覧会のカタログ ステイーヴン・ミルハウザー 柴田元幸 訳 13

ニュートン ジャネット・ウインターソン 岸本佐知子 訳 103

オヴァンドー ジャマイカ・キンケイド 越川芳明 訳 121

魚を飼う女 ヤニック・マーフィー 大高透 訳 137

レグルスとマクシムス ジョン・ホークス 遠藤晶子 訳 145

硬い砂浜

エマ・テナント 伊藤 誓 訳

165

死者たちの夏

リン・ティルマン 風間賢二 訳

175

ブラッド——血——

ジャニス・ギャロウェイ 白石 朗 訳

189

におい

パトリック・マグラア 岸本佐知子 訳

203

ニュー・ゴシックⅡポストモダン・ゴシックとは何か①

風間賢二

214

COVER PHOTO

©Bob Carlos Clarke

THE DREAM KEEPER

Japanese illustrative reproduction rights arranged with Curtis Brown Group Ltd.,
London through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

序文

黎明期のゴシック小説は、物語の小道具や舞台背景、つまりはその装飾的備品を特徴としていた。暗黒の森、血のしたたる地下室、秘密の迷路のある荒廃した修道院、不気味な音をたてる鎖骸骨、雷雨、そして月光——こうした素材を用いて、初期のゴシック小説家たちは作品を創作していたのである。しかし、一八三〇年代から四〇年代にかけて、すなわちエドガー・アラン・ポオの登場によって初めて、ゴシック小説は陰惨でおぞましいものから主眼を転じ、しだいにゴシック的な人間の精神に惹かれ始める。この方向転換によってゴシックに新たな鉱脈が切り拓かれた。そして、人々はポオの作品の中で、犯罪への強い衝動に駆られて悪を為し、判断力と道德感の歪曲によってまともでなくなり、死と病に憑かれた精神や魂と期せずして対峙する仕儀となつたわけだ。ようするに、ゴシックはポオによって内面の世界に目を向け、心理学的障害の極端な状態を真摯に探究し始めたのである。

ポオはゴシックの素材を用いて感情に訴えかける術に熟知していた。ロデリック・アッシャーの精神は彼の館を表象しており、同時にその館は彼の精神を反映している。一方に裂け目が生じ

ると、もう一方にも同様のことが起こる——「わたしの足元の深くてどろに激んだ沼は、ヘアツシャ―家の残骸を音もなくゆつくりと呑みこんでしまった」このような話では、氣候、風景、家系、そして心理はメタファーにおいて互いの区別がつかなくなるまでに血を流しあう。これらの要素の結合は、退廃、衰弱、崩壊の進化過程で活性化されて原初の統一状態——ことばをかえれば、死へと後退していく。つまるところ、つねにゴシックが語ってきたのは、この死にほかならない。とはいえ、ゴシックはしばしば死そのものを描くことを退けたり避けたりして、その副産物や効果にもつばら専念していた。ともあれ、ポオは精神的錯乱の深淵および狂気の不可思議な地勢を測量したいと思っていた。かれのこの作家としての自己の意欲とジャンルを規定する歴史的要素との融合の可能性がゴシックにはあると認めたのである。そうしたポオの立場を原点として、ニュー・ゴシックの作家は内的エントロピー、すなわち精神的・情緒的崩壊に関心を寄せつつ、このジャンルの外装的素材に関しては今日的な観点から語っている。現在でも夜は闇であることに変わりはないが、街路や家の中は昔のように暗黒に閉ざされているわけではないというわけだ。

ゴシックの伝統は興味深い。その誕生に関してはいくつかの要因がからんでいる。まずひとつには、恐怖と戦慄は崇高美の申し子だとする美学理論の影響がある。また、《自然》への信仰も要因のひとつだ。この信仰はサド侯爵が提唱したもののだが、かれ自身は恐怖譚を革命的擾乱を生み出すものと捉えていた。一八〇〇年にサドはこう記している。「文学史上もつとも著名な作家が百年かかっても表現できないような不幸を、この四、五年のあいだに経験しなかった者はいなかった。ゆえに、人々の興味をかきたてるために地獄の助けをかりなければならぬのだ」最後

に、積年の憂愁が生み出した廃墟趣味があげられる。しかし、現在ではこうした趣味の背景には、むしろ陰険な気分が漂っている。

ホレス・ウォルポールは、最初ゴシック小説『オトラント城綺譚』（一七六五年）の作者としての榮譽を担っている。だが、第一次期ブームの傑作は、マシュー・ルイスの『マンク』である。この長編は、教会の薄暗い地下納骨堂で美しい乙女を強姦してしまう破戒僧アンブロシオの精神的破滅、そしてかれの非業の最期までの軌跡を圧倒的な筆力でたどっている。一七九六年におけるこの『マンク』の刊行は、巷にたいへんな騒ぎを引き起こした。ルイス（当時二十歳）と出版社は起訴され、『マンク』の不穏当な箇所は削除されたほどだ。このように、ゴシックはまさにその幼年期において早くも破壊活動分子的志向を示していたのである。

地下道、地下納骨堂、地下牢、地下室——これらが初期のゴシック作家の主題だった。暗くて神秘的かつ密室的空間！ こうした空間は墓の類推物であり、さかしまの場であった。そこでは、恐怖と不条理が良識と合理性をくつがえし、情熱は嫌悪へと変わり、愛は転じて憎悪となり、そして善は悪を生む。『マンク』の主要舞台となっている修道院が格好の例だ。作品内では、神の家が恐ろしく完璧なシンメトリーをもって映しだされている。つまり、アンブロシオが乙女の名譽を汚す淫らな行為に及ぶのは、修道院の真下にあるおぞましき地下納骨堂なのである。明らかに、ゴシックは描く対象の暗黒面に身をすり寄せることを逸樂としていた。そしてまた、さかしまこそ、その基本的な構造原理だったのである。

十九世紀はゴシック小説がはなばなしく開花する時期となった。なかでも、おそらく『嵐が丘』はもっとも優れている作品だろう。この長編は、生者と死者とを隔てる生物学的障害をも超

越してしまふほど激しく燃え盛る情欲の恐ろしい可能性を見事に表現している。吸血鬼は一八〇〇年ごろ文学史上に初めて登場したが、この怪物もまた、生物学的奇形児であり、その死して朽ちはてることのない体質および倒錯した性欲に憑かれてゐるがゆえに他の人間と区別される。ポオの最良の作品の多くにも同様のテーマ——背徳の中でもとりわけラディカルなものとして、死オウロ体愛への強迫観念は何度も取りあげられている。(ゴシック的傾向は、十九世紀リアリズムの金字塔と言われているジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』にさえ見られる。登場人物のひとりカソボン氏は黒服に身を包み、世界の神話を研究している学者であり、死神のような容姿をしているのだが、そのかれのささやかな勝利は、ヒロインのドロシーをまんまと誘惑することである)。だが、伝統の中心に立脚している作家といえ、やはりなんといつてもポオである。かれは、瓦礫と化していく城や冷えびえとした湿っぽい地下納骨堂を求めて十八世紀へとさかのぼり、同時に自身の発狂にいたるまでの飲酒、偏執症、神経症を語って二十世紀を先取りすることによって、闇を走る小道を照らした。その結果、ポオの信奉者の中でもっとも偉大な心理学者フロイトはこのジャンルにおいてもっとも靈感にみちた作品のいくつかを、身の毛もよだつ薄気味の悪いヘケース・スタディンとして探究したのである。

われわれは、人間の本性たる凶悪な衝動によってかつてないほど汚れた歴史の末期に生きている。そして、現代人の心は、神の調停というよりむしろヒューマン・サイエンスの立場から見た黙示録の予見によって定義しなおされた。かつて西欧人が宗教に見いだした魂の安らぎはついでに失った。もはやファウストは、神性と対極をなす地下世界より出現したメフィストレスと対峙することもない。同様に、アンブロシオはキリスト教の永劫の業火に焼かれるようには運命づ

けられていない。今や、地獄は明らかにこの世にある。われわれ自身の心の寢室や地下納骨堂の中に。

過去のゴシック作家が人間の魂の荒涼とした面を浮かびあがらせようとして芸術的ヴィジョンを創造したことは、つとに知られている。こうした芸術的衝動は現代の英米小説の中にも消えずに生き続けているといった仮説をよりどころとして、短篇および長編の抜粋からなる本アンソロジーは編纂されている。ここにセレクトされた作品には、もはやジャンルの伝統的な小道具は見られない。だが、恐怖、狂気、怪奇、死、病気、戦慄、悪、そして倒錯した性欲といった素材を活気づけるテーマがゴシックの感性を激烈にあらわしている。本書にポオの作品が収録されたならば、おそらくかれは、多岐にわたる作品の独自の調子とセッティングに当惑するかもしれない。だが、ポオは必ずしや、それぞれの作品を生き生きとさせている精神に気づいて称賛することだろう。その精神こそ、ニュー・ゴシックにはかならない。

——ブラッドフォード・モロ&パトリック・マグラア

1991年1月 ニューヨークにて

(風間賢二訳)

幻想展覧会 I

展覧会のカタログ

Catalogue of the Exhibition

ステイバーン・ミルハウザー

柴田元幸 訳

CATALOGUE OF THE EXHIBITION ©1992 by Steven
Millhauser

提供 タトル・モリエージェンシー

STEVEN MILLHAUSER

スティーヴン・ミルハウザー

アメリカの作家。1943年ニューヨーク市生まれ、コネチカット州に育つ。

処女長篇『エドウィン・マルハウス』(72)で多くの批評家・作家たちから高い評価を得る。他の作品に『イン・ザ・ペニー・アーケード』(86)、『バーナム博物館』(90)などがある。

[1]

舞踏会のあとの美女

The Belle after the Ball

一八二八年頃

紙にインクと茶の水彩、24.1×29.5cm

大学在学中（ハーヴァード・カレッジ、一八二六—三〇）、ムーラッシュはホガース風の痛烈な風刺画を連作しているが、六枚描いたとされる作品のうち、現存するのは一枚だけである。技術的にはまだ荒さが残るものの、成熟後の作品に通じる大胆さがすでに備わり、辛辣な、ほとんど不気味なまでの嘲笑が感じられる。美女はなかば脱ぎ捨てた衣裳に囲まれ、足元にはかつらが転がり、テーブルの上には入れ歯が置いてある。これだけならありふれた展開にすぎないが、ムーラッシュはそれをさらに推し進めている——仮面のかたわらにはガラスの眼が一個、むき出しの乳房の一方がテーブルの下に転がり、手袋をしたままの左腕が萎びた薔薇の花束と並んで横たわっている。美女の膝には、禿げた、歯のない、眼も一つとれた頭が載っており、残った一方の眼が、悪意をみなぎらせた憎悪のまなざしでこちらを睨みつけている。こうしたグロテスクな情景が細部まで綿密に描かれ、頭のない首から下がった優雅な金鎖のごく小さな継ぎ目一つひとつ